

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00495

研究課題名（和文）モーリス・バレスの小説におけるモニュメントの表象

研究課題名（英文）Representation of Monuments in the Novels of Maurice Barres

研究代表者

田中 琢三（Tanaka, Takuzo）

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：50610945

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、フランスの作家モーリス・バレス（1862-1923）の小説において、モニュメントがどのように表象されているのかを検討した。そして、バレスの小説に登場するモニュメントは、政治的・イデオロギー的な意味を持つとともに、モニュメントを目にした登場人物の想像力を喚起し、その感性や思想に影響を与えるという点で文学作品のような機能があること、つまり、バレスの小説においてモニュメントは政治と文学の結節点であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、『デラシネ』（1897）や『靈感の丘』（1913）などのモーリス・バレスの代表的な小説を取り上げ、モニュメントの表象という従来の研究にはなかった観点から、これらの小説を分析して新たな解釈の可能性を示し、さらにバレスの作品におけるモニュメントの政治的、文学的機能の重要性を明らかにして、バレス研究の発展に寄与した点にある。さらに本研究は、モニュメント研究の文脈においても、文学つまり言語表現によるモニュメントの表象を検討した点で新規性があり、従来のモニュメント研究に一石を投じるものである。

研究成果の概要（英文）：This study examines how monuments are represented in the novels of the French writer Maurice Barres (1862-1923). Monuments that appear in the works of Barres hold political and ideological meaning, but also arouse the imagination of the characters who see them, and influence their sensibilities and ideas - in essence, performing the same function as literary works. To put it in other words, monuments in the novels of Barres are nodes between politics and literature.

研究分野：フランス文学、比較文学

キーワード：フランス文学 ナショナリズム モニュメント モーリス・バレス ジャンヌ・ダルク

1. 研究開始当初の背景

記念碑や記念建造物などのモニュメントの研究は、おもに歴史学や政治学の分野において行われてきたが、文学作品に登場するモニュメントを論じた研究はほとんど存在してなかった。この欠落を埋めるべく 2016 年度から 3 年間「近現代フランス文学におけるモニュメントの諸相」という研究課題名で科研費の助成を受けながら、ゾラだけではなく他の作家も対象として、文学作品におけるモニュメントの表象について研究を進めた。2019 年度から始めた本研究は、以上のようなモニュメント表象の研究を継続・発展させるものであり、19 世紀と 20 世紀の世紀転換期に活躍した作家・政治家で、近代フランスを代表する右翼ナショナリストでもあるモーリス・バレス (1862-1923) に焦点を当てた研究である。

2. 研究の目的

一般に、実在するモニュメントが文学作品において表象される場合、作者の思想や世界観によって、あるいは物語との関連性に応じて、そのモニュメントが伝える出来事や人物の記憶が加工され、変容させられることになる。いわばモニュメントの記憶が作者によって「再創造」されるのである。本研究の主眼は、バレスの小説におけるモニュメントの表象、つまりモニュメントの記憶の「再創造」のあり方を分析することにある。また、モニュメントの研究という観点からみると、従来の研究が、歴史的、文化的あるいは政治的観点からモニュメントそのものを分析しているのに対して、本研究の目的は文学つまり言語表現によるモニュメントの表象を検討することにある。

3. 研究の方法

本研究は、バレスの小説を取り上げて、そのテキストをモニュメントという主題を軸に分析するテーマ研究の方法を採用するものであり、ナショナリズムなどのバレスの政治思想に焦点を当てた研究ではない。もちろんバレスの政治的イデオロギーも重要な研究対象であるが、それはこの作家の小説との関係、もしくはモニュメントの表象との関連において検討する。具体的には 1 年目は『デラシネ』(1897) を研究対象として、パリのパンテオンの表象を検討し、2 年目は『兵士への呼びかけ』(1900) に登場する普仏戦争の戦没者記念碑などのモニュメントの物語的・イデオロギー的機能について分析した。3 年目は、『靈感の丘』(1913) を取り上げ、この小説における宗教的なモニュメントの表象を検討した。4 年目と 5 年目は第一次世界大戦以後の著作を対象とし、バレスのジャンヌ・ダルク受容を検討したうえで、この作家が構想したストラスブールのジャンヌ・ダルク像の背景と意義について考察した。

4. 研究成果

(1) バレスの小説『デラシネ』を取り上げ、この小説で描かれているパリのモニュメントの数々が、物語においてどのような象徴的・イデオロギー的機能を果たしているのかを検討した。特にナポレオンの勝利を記念して建設された凱旋門とフランス共和国に貢献した偉人の墓所であるパンテオンに注目して、これらのモニュメントを舞台として展開されるヴィクトル・ユゴーの国葬のパッセージを分析し、ユゴーと小説の主要登場人物との関係を検討しながら、無意識的な国民的エネルギーを体現するパリの群衆の表象について考察した。そしてフランスのナショナル・アイデンティティを象徴するモニュメントといえる凱旋門とパンテオンの小説における表象が、当時まさに形成されつつあったバレスの伝統主義的・国家主義的イデオロギーが反映されたものであることを明らかにした。以上のような内容の論文を『お茶の水女子大学 人文科学研究』第 16 巻に「バレス『デラシネ』におけるユゴーの葬儀」と題して発表した。

(2) バレスの小説『兵士への呼びかけ』(1897) の第 11 章「モーゼル川流域」におけるモニュメントの表象を検討した。「モーゼル川流域」は主人公スチュレルとその友人サン＝フランの旅行記という体裁となっているが、彼らのナショナリズムの高まりにおいて重要な役割を果たしているのが、二人が訪れるモーゼル川流域のモニュメント、特にフランス兵の戦没者記念碑などの墓碑である。これらのモニュメントはおもに革命戦争と普仏戦争の記憶を喚起するものであり、前者の栄光と後者の敗北が対比されることで、普仏戦争の敗戦によってドイツに政治的・文化的に侵略されつつあるロレーヌ地方の絶望的な状況が浮き彫りにされる。このようにドイツの侵略を想起させるモーゼル川流域のモニュメントは、スチュレルとサン＝フランの愛国的な

ナショナリズムを喚起する契機となる。この「モーゼル川流域」はバレスが 1896 年 9 月に実際に行った旅行記に基づくものであり、作家自身のナショナリズムの形成過程を作品化したものである。その後、バレスのナショナリズムは、1898 年 6 月の父の死によって深まった作家のロレーヌへの愛着や死者への崇拜によって増幅され、1899 年 3 月の講演で「大地と死者」の理論として定式化されることになる。以上のような内容のフランス語論文《La représentation des monuments dans “La Vallée de la Moselle” : une réflexion sur la genèse du nationalisme de Maurice Barrès》を執筆し、日本比較文学学会が刊行する『比較文学』第 63 号に発表した。

(3) バレスの小説『靈感の丘』(1913)におけるモニュメントの表象について検討した。『靈感の丘』は、正統的なキリスト教のローマ・カトリック教会と、異教である土着のケルト的な信仰の対立をテーマにしているが、物語においてモニュメントはこの二つの宗教と結びついたものとして登場する。教会や修道院など石でできた堅牢なモニュメントは制度化されたカトリック教会を象徴するものであり、他方で、墓や廃墟など死と関係するモニュメントはケルト的な死者崇拜の場として表象されている。また『靈感の丘』の舞台であるシオン＝ヴォーデモンの丘そのものが、ひとつのモニュメントであり、バレスにとってはロレーヌの聖地であるという意味で、フランスの聖地とされるパリのサント＝ジュヌヴィエーヴの丘と類似している。実際、バレスはこれら二つの丘を「ノア方舟」や「避難所」という共通した聖書のイメージを用いて表現しており、この作家のナショナリズムにおける聖地の重要さがうかがえる。以上のような分析を通じて、『靈感の丘』におけるモニュメントの表象は作者のナショナリズムや宗教観が反映されたものであることを明らかにした。研究の成果はフランス語の論文《La représentation des monuments et l'idéologie traditionaliste dans *La Colline inspirée* de Maurice Barrès》にまとめて所属大学の紀要『お茶の水女子大学 仏語圏言語文化』に発表した。

(4) バレスにおけるジャンヌ・ダルクの受容について、パリのピラミッド広場にあるジャンヌ・ダルク像との関係を視野に入れながら検討した。第一次世界大戦後のバレスが著作や演説において頻繁に言及しているのが、バレスと同じくロレーヌ地方出身のジャンヌ・ダルクであった。大戦中にバレスはジャンヌ・ダルクを党派を超えてフランス国民を統合しうるシンボルとして称え、戦意高揚のための愛国的なプロパガンダに利用した。他方で、ジャンヌは、カトリックの聖女であるとともに、故郷の村ドンレミにおいてはキリスト教のカトリックだけではなく、古代ケルトのドルイド教の異教的な風土の影響を受けて育った両義的な存在であり、ブレーズ・パスカルとともに晩年のバレスの宗教的な思索の主たる対象ともなっている。バレスにおいて、ジャンヌ・ダルクという国民的英雄がどのような意味を有していたのかを、私的な手記『わが手帖』や死後刊行された『光に包まれた神秘』(1926)に収録されたエッセー「ジャンヌ・ダルクの子ども時代」などを参照しながら、バレスと関係が深いパリのジャンヌ・ダルクのモニュメントに関する考察を交えて分析した。そして、その成果を 2022 年 9 月 17 日にオンラインで開催されたお茶の水女子大学仏語圏言語文化学会の 2022 年度大会において「フランス第三共和政におけるナショナリズムと宗教：モーリス・バレスのジャンヌ・ダルク受容をめぐる」と題した講演において発表した。

(5) 第一次世界大戦後にバレスが提案したストラスブールにジャンヌ・ダルク像を建てるという構想に着目し、この構想の背景を検討した。バレスはヴェルサイユ条約によって非武装化されたラインラントをフランスに文化的・精神的に統合させることを目指したが、その統合のシンボルとしてバレスが持ち出したのがジャンヌ・ダルクであった。従来はほとんど研究されていないバレスの『ライン河の精髓』(1921)をおもに取り上げて、彼が構想したジャンヌ・ダルク像の意義を検討し、この作家における政治とモニュメントの関係性を明らかにした。そして、その成果として、2024 年 3 月 15 日にオンラインで開催されたプロジェクト人魚第 70 回公開研究会において「モーリス・バレスとラインラント問題：ストラスブールのジャンヌ・ダルク像をめぐる」と題した発表を行った。

以上のように、本研究では、モーリス・バレスの小説において、モニュメントがどのように表象されているのかを検討した。そして、バレスの小説に登場するモニュメントは、政治的・イデオロギー的な意味を有するとともに、モニュメントを目の前にした登場人物の想像力を喚起し、その感性や思想に影響を与えるという点で、文学作品のような機能もあること、つまり、バレスの作品においてモニュメントは政治と文学の結節点であり、イデオロギーと想像力が交錯する場であることを明らかにした。また、本研究の学術的意義は、『デラシネ』や『靈感の丘』などのバレスの代表的な小説を取り上げ、モニュメントの表象というこれまでのバレス研究にはなかった観点から、これらの小説を分析して新たな解釈の可能性を示し、他方でバレスの作品におけるモニュメントの政治的、文学的機能の重要性を明らかにして、バレス研究の発展に寄与した

ことにある。さらに本研究は、モニュメント研究の文脈においても、文学つまり言語表現によるモニュメントの表象を検討した点で新規性があり、従来のモニュメント研究に一石を投じるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田中琢三	4. 巻 3
2. 論文標題 フランス第三共和政期におけるナショナリズムと宗教：モーリス・バレスのジャンヌ・ダルク受容をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 お茶の水女子大学 仏語圏言語文化	6. 最初と最後の頁 173-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TANAKA Takuzo	4. 巻 2
2. 論文標題 La representation des monuments et l'ideologie traditionaliste dans La Colline inspiree de Maurice Barres	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Etudes francophones d'Ochanomizu	6. 最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 TANAKA Takuzo	4. 巻 63
2. 論文標題 La representation des monuments dans "La Vallee de la Moselle" : une reflexion sur la genese du nationalisme de Maurice Barres	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Comparative Literature	6. 最初と最後の頁 246-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中琢三	4. 巻 16
2. 論文標題 バレス『デラシネ』におけるユゴーの葬儀	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 お茶の水女子大学 人文科学研究	6. 最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中琢三
2. 発表標題 フランス第三共和政期におけるナショナリズムと宗教：モーリス・バレスのジャンヌ・ダルク受容をめぐって
3. 学会等名 お茶の水女子大学仏語圏言語文化学会2022年度大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中琢三
2. 発表標題 モーリス・バレスとラインラント問題：ストラスブールのジャンヌ・ダルク像をめぐって
3. 学会等名 プロジェクト人魚第70回公開研究会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------